

アメリカ自然主義小説序論-理論と実践のからくり-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2009-02-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 亀山, 照夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/1124

アメリカ自然主義小説序論

—理論と実践のからくり—

亀山照夫

自然主義の衰退が言われてひさしい。それはある国の特定の現象というのではなく、ある時期を契機に急に見せはじめた世界的な現象である。自然主義の思潮そのものがすでに前世紀後半に一つの盛り上りを見せてしまったのだから、その後の歴史の身尺ではかれば批判が生まれ、衰退を見せるのも当然だろう。

しかし、文芸評論家からはとくに悪霊のように思われている自然主義もとは言えば歴史の落胤のごときのもであり、だれそれの創案によるわけではなく、ほとんど自然発生的に生じたものである。おおまかな言いかたをすれば十八世紀以来の進歩の信奉という潮流に乗せられて、科学啓蒙思想と芸術活動を結びつけようとして生れたのだ。比喩的な言い方で言い換えれば、近代人がかれらの心の暗闇から一気に悪鬼を飛び出させたのだ。それ

ゆえ人間の情念が暗くよどみ、本能という自然の水路を求めて、合理主義のわくの外へ逃れようとするときにはきまって跳梁することになるのである。

人間の自我の表現は歴史の変革を節としてぐんぐん変わっていく。いままら申すまでもなく、今世紀の第一次、第二次世界大戦は世界の人々の心情を大きく変えていった。たとえば第一次欧州大戦の勃発は、アメリカの哲学者ウィリアム・バレットの言葉で言えば、西欧ブルジョワジー文明の崩壊、さらには「人間の全体的瓦礫」を意味し、その時を境にしてヨーロッパ人は「たがいに異邦人として顔を接せねばならなくなった」⁽²⁾。そしてこれを機にいままで残存してきたロマン主義の一表現であるしただたかな個性の高揚は影をひそめ、人々は画一化され、きちんと組織立った社会の中でいかに自己を強調しうる

か)が大きな問題となった。ヤスバースの実存主義哲学はこうした現代人の意識の変革を背景にして生れたとバレットは指摘している。

しかしこのことさえ次の第二次世界大戦ではその存立を問われたのだ。言うまでもなくナチズムによる世界侵略、優良民族理論にもとづくユダヤ人大量撲殺があり、原爆の投下といった恐るべき事態が襲った。ユダヤ系の文芸評論家ジョージ・スタイナーはあのいまわしい歴史体験のちには、西欧の文明はアウシュヴィツを忘れては語れないと言ひ、「青髯の城にて」、ヨーロッパの「高等教養の精神的心理的習性と非人間性への誘惑との間にまだほとんどかわつていない或るつながりがある」(「言語と沈黙」という疑問を前提にした評論活動を行うにまでいたつてゐる。

このようにヨーロッパ人のみならず世界の人々のメンタリティーが洗いざらい審問に付され、かれらの個としての存続が非人称化されたのはもちろんのこと、むしろその非人称化された、匿名の世界に逃げこみ、私的時間の堅壁を築き、その中で自分だけの快楽を忘我の啓示的瞬間に生きようとする意志をあらわにしはじめた。それは組織からの逃亡であるとともに、歴史に参加することの欺瞞をいやというほど知らされた現代人の醒めきつた

感覚がもたらしたものである。長い知的啓蒙の歴史の末にたどりついた人間の絶望的な反逆のスタイルでもある。

このような反理知主義的傾向はもともと自然主義の標榜でもあった。自然主義は、あとでもう一度触れることになるが、ロマン主義の感傷に対するアンチ・テーゼとして、いわばハードな心的メカニズムを理論化し、その結果として、近代人の「事物を粉飾しないで、あるがままにあらわしたいと願望」(ヘルマン・ブロッホ)をむきだしにしたものであるから、当然理性よりは狂気Vを、秩序よりは混沌Vを志向した。そしてそれを表現するメディアが手探るうちに探してあてたわくが社会であり、その大きな母型の中で、近代人の個としての苦悩を全体的な型姿として表現したのである。したがつてその設定は、ロマン主義小説の神話的スタイルの設定である「陰險の森」(ライト・モリス)とか「内面化した社会」といった、人間の心理の投影としての自然ないしは社会ではなく、そこに表出してくる空間は個人を圧倒し、その間の主客は転倒さえたのである。そしてそこに描かれる人間はたしかにブロッホの言うように「人間的生の全体性」を表現するようには意図されてはいるのだから、いわば「宇宙的天候」に翻弄されるがままのきわめ

て脆弱な存在として立ち現われた。本能のままに動き、
獸的衝動をむきだしにする群像はどちらかと言えばグロ
テスクで、道徳的にもアナーキカルであると非難され
た。

こうして自然主義に見られるA狂気Vひとつとりあげ
てみても、現代人の歴史的認識のあとで個としての表現
の新しい可能性に目覚めて生れた非理性性、その周辺に神
聖な闘をめぐらそうとする意識的な所為とはおのずから
異なる。自然主義のA狂気Vはあくまで科学主義のメスに
より小説の実験室の中で剔り出された近代人の心の暗闇
であり、生の極限状況に追いつめられてパニック化した
人間の呪咀にほかならず、むしろ消極的な価値の赤裸な
表現でもあったのだ。このようなところにも自然主義の
前近代性は潜んでいるのかもしれない。

しかし、当時の理論からすればむしろ異常な症例の一
つとして観察されたA狂気Vも、本来は自然主義的なもの
の本質であったので、原始的なものへの帰還の可能性
を内に秘めてもいたのである。あらゆる偉大な芸術の
「無意識の深層には、いま一度神話となることが許され
て、いま一度宇宙の全体性を描き出したい願望がひそん
でいる」とヘルマン・ブロッホは言っている。自然主義
が一度はA非合理的なものVを志向しながら、当時の科

学主義的悲観論の鑄型に押しこめられて一つのスタイル
になってしまったので、逆に神話を追い出すかたちにな
ってしまったのが不幸だったと言わざるをえないのだ
が、アメリカの自然主義文学作品のなかには合理主義の
網目をくぐりぬけようとしてそのまま原始の世界に帰還
してしまつた作品もある。たとえばジャック・ロンドンの
「荒野の呼び声」などそうである。この作品が「宇宙
の全体性」を描き切つたかは疑問がある。しかしわれわ
れが現代からもう一度ふりかえつて自然主義を考える場
合、いたずらに理論の前近代性にいら立つことなく、わ
れわれの神話世界への憧れを増幅させながら、「自然主
義が本質的なものに転化しかかる限界点」である「原始
自然主義」の可能性を考えてもよいのではないだろうか。
もちろんこれは一つの願望であつて以下の論文でこ
れがどこまで立証されるかというのではない。ただ自然
主義の前近代的要求と現代性の均衡を考慮に入れない自
然主義文学論はほとんど歴史的記述の域をでないと言わ
ざるをえないからである。それだけにその弁護もきわめ
て難しいと言わざるをえない。

□

自然主義小説家に寄せられる非難の大部分は、かれら

が「材料をあまりに平板的・外面的にとり扱っているために、価値や意味を追求するのを妨害している⁶⁾」という点に集約されるだろう。じじつかれらは生きることの縦の深さから生れる実存感覚の鋭さにおいてはけっしてひけているようであるし、素材の処理は不器用で、くどくどしく、平板な時間の流れに乗せられてしまうため、どうしても空想力、想像力の飛躍が自在でなくなるうらみがある。それにその人物像も作者の私的怨念がこもったようなあざとい表現に終始して、悲劇の主人公の資格に欠けるとされて、反悲劇的というレッテルさえ貼られている。

このように自然主義作家にまわりついた汚名は、彼らは何よりもまず精一杯生きて、その実感をほとんど虚飾をまじえずにあるがままに表現しようとする態度から生れる。かれらはまずありていに自己をさらしだし、醜聞の可能性をも無視してそれを表現する世界の中心部にすえてみる。もちろん作者の視点そのものは書きこまれる対象から離れて立って、いわば全知の視座に置かれるのだが、そうする意識的な客観性がかえってかれにまわりついた実体験の積層を正確に観察していつそう素材の私的化が強まり、結局八自分のことVを書く結果に終

るのである。

埴谷雄高氏は「ドストエフスキーに於ける生の意味」と題する論文のなかで、ドストエフスキーの人物が小説のなかに「歩いている」のは、「ただただひとつのつきつめられた精神としてそこに立っている」からだと言う。このような人物の實在感⁷⁾は作者みずからの、「八自分のことVがあらゆる人物にわたって拡がっている精神の同質性」から生れるもので、作品は作者の「靈性の均質な微光」を帯びた人物の精神の深さをみごとに彫琢するものとして立ち現われる。同じく八自分のことVを書くのでも、自然主義者の解きあかす自己という行為はやや自己慰藉を秘めた自分の生いたちやら持つて生れた素質の重要視に走ってしまう。もちろんそこには次第に切り裂かれていく眼前の世界とのういういしい対峙あるいは反抗という認識の傷あとが生々しく尾を引いていて、読者の共感を呼び醒ますにはじゅうぶんの素材としての面白さはある。しかし上述のドストエフスキーなどの場合と決定的に異なるのは、創造する各人物に等質の距離を保ちつつ、その一人一人に作者の截然とした個性の分身としてまぎれもなく純粹な精神の表現体⁸⁾にまで昇華させるか否かというところにある。しかしその答えは否定的である。

自然主義小説家は記録を重視する。その記録はかれらの生身の生活から生れたものである。そこまではよい。しかしそれは下手をすればただ無作為に並べられた事実の列挙であり、さらには生に対するどん欲な嗜好が強いだけにともすれば怨念めいた私情の吐露に終る危険がある。現実と夢の架橋を渡るときの恍惚と不安の振幅が大きく、そのバランスをとる超自我的抑制の力が強い。それだけにその全体的ペースベクトイブはともすれば作者個人の狭隘な自我の中に閉じこめられてしまい、創造上の人物も、そこを超えた飛躍を許されず、作家の独善的判断の囚人と化してしまふ。かれらは自由な精神のひとつひとつの個性的表現として「そこに立っている」のではなく、私情にまみれた手負いの人物として立たされているのだ。

だがかれらの文体をもととせず人生の真実らしさのみを追求する態度は評価されてよい。いまでもかれらの創作がどこかで読みつがれているのは、やや前時代的ではあるが、その根底にある人間のドキュメントのもつ迫真性であり、そこから布衍されてくる切々たるヒューマニズムである。書かざるをえないというかれらの衝迫はそのまます人間の万感こもった生命の賛歌にもなるのだから。

そうした自然主義文学の基本的特性を基盤にして少し個別的に話をすすめてみたい。まずいかに屋上に屋を架す試みとは知りながら、自然主義思潮の歴史的輪郭を、さらには標題のアメリカ文学における展開へと進めてみたい。

自然主義という言葉は十九世紀の中ごろからフランスで使われたたようだ。それはまず絵画の批評用語として使われて、広がったらしい。ビエール・マルチノの『フランス自然主義』⁽⁸⁾では一八六三年の美術展評としてカスタニヤリーという美術評論家の次のような言葉が引用されている。「芸術とはあらゆる様式と段階における生命を表現するものであるというのが自然主義派の主張である。その唯一の目的は、最大の硬度と最高の緊張において自然を再現することである。それは科学と矛盾しない事実である」。このような言葉にも自然主義が科学的実証主義に支えられて「自然を再現する」という理想にまず出発している事実がうかがわれる。すなわち自然を等価的に観察して、今まで宗教的意匠のヴェールにおおわれて寓意化していた自然を解放し、その「現実性」の漲る生命そのものに触れる喜びを芸術化していった運動だといってよい。そうした傾向は同年のサント・ブーアの次の発言にも明瞭にくみとれる。「自然主義哲学は科

学の方法と結果とを万事に導入し、万事に優先させようとする。みづからを解放したかれらは、幻想や、曖昧な議論や、誤った偶像や力から、人類を解放しようとする。この二つの発言が繰り返しのべる必要もないほど明確に自然主義の本義を証明して見せている。ようするにこの運動の本質は「自然」の「現実性」に迫り、自然を「幻想」ないし「偶像」の虚妄から「解放」しようとしたことにあるのだ。

この「現実性」を探る試みはその後印象主義絵画に発展して行つた。印象主義は物体に現実性を与える媒体としてまず、事物を可視ならしめ、陰影でもって形姿を象るハ光Vを、そしてまたカンヴァスの上に塗られたハ色彩斑点Vの二つを考えた。この二つの媒体の相補作用によつていままでにはなげなく見過されてきた事物を立体感、色相といったさまざまな角度から接近し、描く対象の真の姿に迫ろうとするこの一派の態度は「現実性」の新しい見地として他の芸術運動にも多大の影響を与えたのである。この時代のこうした運動をすべて包括して言えることは、科学主義の抬頭がまず前提としてあり、すでに人々の頭をかすめていた宗教に対する懷疑心が一連の科学上の新発見、ならびにダーウィニズムの普及によつて促されて、世界のすべての事象の真の所在を探しも

とめ、そのリアリティーをつきとめたい衝動に変わつていった事情も大いに一役買つていたのである。このようにして自然主義は十八世紀以来のヨーロッパの進歩思想の上げ潮に乗つた科学主義思潮の所産であり、サント・ブーブの定義の背景にある脱ロマン主義の一つのあらわれであるきわめて合理的な考え方でもあるのだ。だから一方においてロマン主義が、ニュートンの「不変力学法則」たる「新しいメカニズムが主観経験を排除し、人間の精神をものの領土から疎外してしまつたこと」の反動、この奪われた個人的価値を世界に呼び戻すこと」であり、「自然を人間的意味で満たすこと」であつたとすれば、自然主義はそれをちょうど逆にひっくり返したのが定義になる。そう考えてくると自然主義とはいかにもメカニックで「人間的意味」の欠如した寒々しい世界のようにであるが、実はその印象は正しいのである。ピエール・マルチノが「自然主義はあきらかに十八世紀の相続人であり、イデオログ精神の継承者である」と言つてゐるのは、サイファアのロマン主義の定義を逆にしたもので、その言つている内容はまさしくおなじなのである。このように自然主義は人間をもう一度宇宙の冷酷なまでに美しく整つた秩序に置いてみて、その森閑とした無限の広がりの中で絶対の孤独に立たせたとやつてもよ

いのである。そこからいわゆる「自然の無関心」とか、人間の「生の無意味性」とかいう自然主義の常套語が生れてくるのである。

このように自然主義の系譜には人間と自然（あるいは宇宙）との深いかかわりがあり、その歴史の起源をさかのぼれば中世、さらにはギリシャの人間および自然観に行きつくのかもしれない。しかしここではその跡づけを行う必要は必ずしもあるまいから、もつと近世に引き寄せて考えれば、とくに十八世紀後半の理神論によって理性を伸介とした自然と人間の歩み寄りが見られたのち、十九世紀に入ると一連の進化論上の発見により、神と人間と自然の三つ巴となる。ここでは神学上の桎梏が解かれ、かつては「神学の侍女」でしかなかった自然が急速に抬頭し、神のたくみを破壊し、その尊厳を後退させ、人間をその冷酷なメカニズムの一部に組みこんで優位に立ったのである。だからここでの「自然」がエミール・ゾラが「実験小説論」のなかで「実験的人間性探求者としてのわたしは：有用なものと有害なものできくあいの機構を示し、いつか人類がこれらの現象を支配し指導できるように人間や社会の諸現象の決定性（*déterminisme*）を引き出すのである。換言すればこれは自然の征服である」と言うときの「自然」とは自ら異なることは言うまでもない。

このゾラの自然主義小説論あたりから「自然」は本来の内実を失ってむしろ人間を主体にして、人間と「社会機構」すなわち環境要因との複合作用を「自然」というような謂（い）に変ってゆき、いわゆる人間に内在するあるがままの欲望、情熱といった感情のメカニズムをも「内なる自然」として考え、内なる自然と外なる自然という二者の、抑制のきかない脅威を「自然」として考え、その両者の人間におよぼす「害なるもの」を追求することが、「自然の征服」である、と考えるようになったのである。このあたりで、ピエール・マルチノが言うように、「自然主義」は本来の義を逸脱して、しだいに「もつとも卑俗で恥ずべき姿で自然と人間をしめそうとする真実の怒り」のみ意味するようになる。しかし、いづれにせよ自然主義運動は、十九世紀の人間精神の危機を、神の庇護の後退、物質の力の侵潤、科学主義の優位といった歴史の転位を背景に生れたものである。それはたんにフランス一国にとどまらず、汎世界的現象となり、歴史の否応ない進展の里標の一つとして立ち現われてござるをえない運命にあったのだ。またそうした全体的な眺観のなかでとらえられずしては自然主義はいたずらに些末主義の弊害におちてしまうのである。

この汎世界的な現象がアメリカに入ってきたのは南北

戦争（一八六一—一六五）が終つてほぼ二十年に近い歳月を經た一八八〇年代の後半であつた。そしてヒュドラのようにとらえどころがなく、また根絶し難い禍のようにならなうに思われている自然主義がアメリカ内部で消化吸収されるにはそれなりの障害もあり、また消化の変様も見られた。しかし歴史の歩みというものはここでも同質の展開をみせ、やはりアメリカ社会で進行しつゝあつた近代への脱皮と期を一にしながらアメリカ人の感受性そのものにも大きな変貌があつた。

その変貌の引き金の役割を果したのがすでに触れた南北戦争であるが、その結果として生れた脱ロマン主義の傾向が一層拍車をかけた。この戦争を転機にして、それまでアメリカ人の心の奥深く燃えさかっていたエマーソン流の精神上的の独立自恃、あるいは自然を精神を写す鏡としてとらえる象徴主義、アメリカ人の良心として良くも悪くも支配的であつたカルヴィニズムの色彩の強い宗教心、こうした、いまさら贅言をついやす必要もないアメリカ文化の伝統的要素が、内乱による国土全体の荒廢、エマーソンが戦後の世界にはただ「慢性的希望」しか持てないと言つた言葉にも象徴される人心の虚脱感、さらにはそのあとに再建された世界の風景の一変等の新たな様相によつてもはやかつてのアメリカ人の理想主義

を支える力にはならなくなつてしまつた。おなじアメリカ人の夢がその価値轉換を迫られたと言えればわかりやういだらう。

このような事態を考慮して、チャールズ・ウォールカットは『アメリカ文学の自然主義、一つの分岐流』という研究書を書いてゐる。ウォールカットはそのなかで、世紀末に収斂した感のあるアメリカ自然主義思潮の源流としてエマーソンの言う精神——自然の一元論を置いて、それこそが「アメリカ思想のなかで自然主義の背後に照り映えた夢」であると言ふ。そしてこの一元論がアメリカ社会の変貌と微妙に対応しながら、樂觀論と悲觀論、意志と宿命、社会改良主義と機會至上主義の孕む絶望という二つの流れに「分岐」して、対立しながら世紀末の思潮を二分し、自然主義はその後者の流れに吸ひ寄せられたものだと言ふ。多少論理の強引きが目につくにせよ、世紀末のアメリカにとどまらず、その後の陸続としたアメリカニズムの伝統を二分する断層面によつてきたる素因をやや図式的ではあるが納得のいく形で表現している。こうした変貌の局面は一部の知識人にのみあらわれた面もあるが、その不安と樂觀のアンビヴァレンスは他の国にはみられない特色であつたことはたしかである。

他方本場のフランスの文壇では自然主義は一八八〇年前後に退潮に向って行き、ただゾラのみが浩瀚なルーゴン・マッカール叢書の完成を目指して活躍していた。ゾラは「実験小説論」を掲りどころとして自然主義小説の教典ともいべき作品をつぎつぎに生んでいったが、彼の場合にはつきり言えることはまず記録を重視し、それを一家系の代々に及ぶ人々の遺伝的資質や運命の転轍たる有様を膨大な事実の羅列に還元して、みずから立てた理論を実証しようと試みた。このように自然主義者は微細な記録を中心として「事件の動きに介入する自然および環境の力」といふ決定論的役割を示して、物質的環境の束縛⁽¹⁶⁾をたんねんに追いつめたのである。

自然主義にまつわる定義上の問題はあるにせよ、一貫して共通するのは人間—環境の關係のなかでとくに後者の主体性にあり、人間が環境の決定要因に敗れるプロセスそのものでジャンルが決せられるといつてよい。その意味からもフィリップ・ラーブが言うように自然主義小説では、「人間は環境に従属するものとして描かれるばかりでなく、それによって決定されてしまう存在であり、——環境が、そこに生息する人間と主人公の役割を交換してしまふ⁽¹⁶⁾」という。こうして並べてみてみてもいかにも硬ばった定義のおもむきは否定できず、これにゾラの

言葉を加味していえば、自然主義文学は人間が生れついでそなわった遺伝的体質や性格を出発点として、それが貧困とか欲望とかいふ環境的な因子につき動かされて頭在化してくるありさまをいわば実験室のなかで丹念に記録していったものであると言うべきだろう。それにしてもじつに味気ない定義である。

前後してしまつたが、こうした定義が世界に伝播して行つたばあい、国によつてその受けとめられ方、消化のされ方が違ふのはいうまでもない。日本文学では自然主義は「日本的な精神風土」に根をおろし、近代日本人の「自己確立」(それは同時に「自己崩壊」でもあつた)から「自己確認」への重心の移動の架橋的な役割を果たした文学として評価されているようである。明治開化後の日本人の意識の独特な近代化への目覚めのプロセスの中でたまたま遭遇したこの理論は明治末期の青年文人に大いにもてはやされて、私情暴露小説の変名にさえなつたのだが、やがて自己確認の儀式が大正デモクラシーとともに始まると形式としてすたれて、その後わずかに私小説のスタイルの中で顔をのぞかせる表現の一要素にすぎなくなつてゐる。

アメリカ文学では事情はやはりずいぶんと異なるようだ。たしかに叙述^{ナラティブ}の様式として残るにせよ、むしろ

自然主義理論がもろに表面化した小説は皆無といつてよいのではないだろうか。明治末期の日本文学の末梢化にだけにその生々しい人実人生の活写はずいぶんとフランス自然主義に近いとさえいえる。ところがアメリカではむしろ個人の自己確立に先行してまず物質文明の、すさまじいまでの圧力に、アメリカ人は目に余る狂態を見せた。その洗礼を受けたシオドア・ドライサーが『ジエニー・ゲアハルト』(Jennie Gerhardt)の中で言った次の言葉はいみじくもその実証的な証言となるだろう。

われわれは物質化された力の衝迫がほとんど抗しがたい時代に生きている。精神的な性質の持主はその衝撃に圧倒されている。われわれの物質的状况の恐るべくも複雑化した発展、社会の形態の多岐多様性、鉄道とか急行とかの媒体によつて集められ、ふたたび分岐され、伝播されたわれわれの想像的印象の深さと詭弁：こうした存在の要素が結びついて、万華鏡のきらめきとも称すべきもの、すなわち、知的、道徳的性質を疲れさせ、鈍麻化してしまふ生活の目もまばゆき、混とんとした変幻たる光景を生むのである。⁽¹⁸⁾

ドライサーは直接には金欲の呪縛を言っているのではないが、人物象の力Vというきわめて暗示的な言葉で、当

時のアメリカの精神風土Vに及ぼした社会変化の、とくに人物象Vのしめる役割を重要視している。ドライサーが自然主義のスタイルを借りて文学の世界に入ったのも、この力が一つの運命となつて彼個人を「圧倒」したからである。

しかしその論議は少し後で触れるとしてもより自然主義の人物象Vが人物象Vというような外延的な意味ではなく本来の人物象Vを含めていたことはすでに述べた通りである。そこには科学の採用のもとに、宗教的神話的な虚妄のヴェールをとかれたむき出しの、本源的な人物象Vがあつた。アメリカでは初期の自然主義理論では、いわゆる進化論の影響が大いにそのプロセスにあづかつたのだが、そこが日本などと事情を異にする第一の理由である。それではなぜ進化論的自然観がとくにアメリカで流行したのだろうか。

進化論といえはダーウィンに触れざるをえない。かれが一八五九年に出版した『種の起源』はヨーロッパを震撼とさせた。青年時代にビッグル号に便乗して主に太平洋上での生物の生態学上の発見をもとにした「進化」の概念は、まさしく人物象Vを赤裸な姿にとりもどす引き金となつた。彼には別に神学的体系を破壊する意図はなく、彼自身も終生敬けんなクリスチャンであつた。しか

しこの学説は——とくに人間をも生物学的進化のペース
ペクティブとしてとらえるという——宗教界に飛び火し
て一大論争を生んだのである。当然キリスト正教の意匠
の考え方と真向から対立し、人間の動物的性質を強調し
てしまえば、キリスト教の聖餐の儀式のもつ神人一体の
倫理的根柢をくつがえしてしまった。この論争はヨーロ
ッパのみならずアメリカでも多大の反響を呼んだ。とく
にアメリカでは進化論は宗教界の論点にとどまらず、
ハーバート・スペンサーの流行とあいまってソーシアル
・ダーウィニズムという一種資本主義社会のドグマにま
で成長していくのである。このあたりがドライサーのい
うA物質の力Vの意義を再認識させるアメリカ独特の現
象であった。つまり、スペンサーをへて、純粹自然は物
質化された自然へと変貌していったのである。

このような書き方をしたのも、アメリカ自然主義の
A自然Vがいゆる神の庇護を解かれた絶対孤独の自然
を意味すると同時に、ゾラならさしずめ決定因子と言
うべき、A物象の力Vたる資本主義的社会機構そのものを
含みこんでいるからで、人間的な、A内なる自然Vはそ
うした世界のはざまにあつて挙げる孤独の叫び、夢を奪
われた魂の倫落の叫びにはかならないからだ。その点で
も、A自然Vの實質がヨーロッパの自然主義と比べても

ずいぶんと明快な輪郭を、悪くいえばそれだけ形象化さ
れた輪郭を帯びていたと言つてもよいだろう。

その元凶たるソーシャル・ダーウィニズムについては
あまりくどくどしく述べるのも一つの歴史的記述にとど
まるので簡単に触れるにとどまる。この思潮は今でこ
そ、「生存競争」とか「適者生存」というおぞましい言
葉がその名残りをとどめているにすぎないが、一八七〇
年代から八十年代のアメリカの思想界のみならず、経済
界をも席捲した一種の流行病であつた。いわゆるスペン
サーの流行の時代である。スペンサーはダーウィンを始
めとする進化思想に、ヘルムホルツのエネルギー保存の
原則等を取り入れて独自の社会学体系を打ちたて、あら
ゆる社会現象に適用していった。この理論がなぜアメリ
カで流行したかはすでにすぐれた研究があるので触れる
必要もないだろう。一言だけ触れば世紀末のアメリカ
社会の狂熱的な物質文明の中では、一方では社会改良主
義、他方では競争を社会の倫理にすえて、そこから「不
適格者」が排斥されても必然として認めるような心情が
支配的であつたことは見逃しがたい。スペンサーの原理
の苛酷な論理は「社会学の原理」の次の一節にじゅうぶ
ん見てとれるだろう。

同一種族の個人のあいだで行われる競争では、適者

生存が、最初からより高度なタイプを生んできたことを、われわれは単に認めるだけではない。或長も統合も主として別々の種のあいだに戦われる絶えざる闘争によることも認める。普遍的な闘争がなければ、積極的な権力の発展もなかったであろう。

こう読んでみると何やらナチズムの純血国家主義に通じるような気持ちさえする。だから当時の「ソフトな」心情の持主が彼の思想には「個人の存続も、神も、高邁な権力もない」と嘆いたとしても少しも不思議ではない。こうしたおぞましい「闘争」の論理はもちろんスペインサーの体系の中では究極の「均衡持続」——「偉大な完全性もつとも完璧な幸福が確立される」平衡状態——にいたるための一過程にすぎなかったのだから、それにしてもそこまでの果てしない道程にはただこうした休むことないハ進化Vの血みどろの闘いしかないとわかれば絶望するのも当然といえる。今にして思えばおおよそ愚かしいとさえ思えるこのような現象も、まだ真の科学的啓蒙に達せぬ当時の人々には真実として受けとめられたのだった。たとえばドライサーは青年時代にスペインサーの「第一原理」を読んだあとの衝撃を、「人間の理性も、闘いも、墮落も、喜びも悲しみも……化学的強制作用にすぎず……人間は機械で、たくまれもせず、ぞんざいに作り

あげられ、追いたてられていく存在なのだ」と書いている。このように人間の存在はただ盲目的に、宇宙の壮大な進化のプロセスにまかせて究極の休息をめざして進むひ弱な、「無限に微少な斑点たる」存在でしかないとすれば、自墮落な生活に落ちてしまいか、マーク・トウェインの「不思議な旅人」に跳梁するサタンのように凡俗の世界を見くだす超人にでもなる以外にはない。世紀末の知識人たちはじつにこの人間存在の無目的性というペッシシズムをどう乗りこえるかという大問題と真剣に取りくまざるをえなかったのである。

もちろん本来のソーシャル・ダーウィニズムは思想的なものではあっても、アメリカの社会機構のなかでは、その楽天主義の傾向にも結びついて、産業界における保守主義を確固たるものにする論拠にすりかえられてしまった一面もある。よく知られたエピソードに、富豪ジョン・ロックフェラーが日曜学校で演説した言葉のなかで「大きな事業が成長していくのは一つの適者生存にすぎない」と言い、「アメリカン・ビニータ」というみごととなばらの花が他のばらを犠牲にしたハ自然の法則Vの結晶であるときき合いに出して説明する心情にも産業界の苛酷な論理がにじみ出ている。

こうして世紀末にむかったアメリカの初期自然主義文

学の頭上を、冷酷な宇宙のメカニズムに組みこまれた人間のひよわな叫びやら、かたやそれを産業界の擁護の理論として応用する手前勝手な心情と、その組織からはみだされて失墜してゆく敗者の落胆とが樂觀と悲觀の截然たる判別の色あいをおびて、彷徨しつづけたのであった。

アメリカ自然主義のほかならぬ精神風土Vが、その出発点でこのようなおぞましい状況を孕んでいたのは注目すべきで、それが無味乾燥な説明に終始する危険を承知のうえであえて繰り返しのべても、その特異な性格の一面はあきらかであると思う。

ふたたび論をもとにもどして考えれば、アメリカの初期の自然主義者がかかえた問題は、もとより自己を正確立Vし、正確認Vする汗みどろの努力そのものではあったのだった。しかしかれらの努力はあまり報われなかったようだ。日本文学におけるA家Vを中心にした因襲的な世界の中で目覚めていく近代的自我といった内省的なプロセスではなく、アプリアリとしてあった機械論的な宇宙論ないしは冷酷な現実の社会機構とまず戦わねばならなかった。個人の成長はまず外なる自然の力との対抗そのものであったのだ。こうした事情を前提として、個別的にその変様をたどってみたいと思う。

四

いままでるる述べた特殊な背景を軸にした世紀末アメリカは統一国家として茫洋たる未来の途についた印象が強い。しかしそうした希望の風を孕んだ航海とみる見方の背面には、たとえばヘンリー・アダムズ⁽²²⁾のように、すでに自分の教育は完了し、不気味なダイナモの地鳴りをする、混沌とした世界の黎明とみる世代の見方もあった。政局的にはアメリカのキューバ政策に端を発する帝国主義の徴候があらわれはじめ、その見えすいた侵略の意図に幻滅して、進歩の信仰を捨て、いたずらに荒唐無稽な歴史的回顧にふけったり、ひっそりと地方の習俗の中で生きようとする人々もいた。歴史ロマンスの流行はその特徴的なあらわれであった。

しかし自然主義文学の特性そのものからして、その中心になる世界は安逸な回顧趣味に走ったり、未来をただ茫然と手をつかねてみている人々の感性に支えられるのではなくして、「過渡期」の、いわば「近代性の痛苦」(ache of modernity)⁽²³⁾をじかに感じた青年文人によって新たな地平が拓かれていったのである。しかしステイブン・クレーンを始めとする白面の文人が続々と登場するにはそれなりの橋渡しが必要だった。その意味からも先輩の文人ウィリアム・ディーン・ハウエルズ(William

Dean Howells) の存在を無視するわけにはいかない。そしてとりわけこの一連のリアリズム運動に鋭い切り口を与えたのは一八八六年五月四日シカゴのヘイマーケットでおきたストライキ集会後の整備にあたった警官隊にむかって投げつけられた一発の手榴弾ではなかったろうかと思われる。この事件で七名の無政府主義者が白黒もはつきりせぬまま絞首刑にされるや、アメリカ全土がその裁決の不正をめぐって大論議をかもし、とくにハウエルズがこの不正裁判に向けた指弾はきわめて厳しく、かつ作家の社会に対する姿勢がこのように決然と示されたためしはなかった。ここを契機としてロマン派運動の睡夢はすっぱりと切り捨てられ、いわばその裂け目から「凡俗の視野」がひろがり、社会の底深い黒々とした深淵が見えはじめたのである。ハウエルズのこのときの抗議とアメリカ文明に対する嫌悪が、「新興成金の災厄」(A Hazard of New Fortunes 1890) となつて結実したのであった。

当時ハウエルズは個人的な災難に次々と襲われ——とくに愛娘ウィニフレードの死(一八八九年三月三日)は彼に痛恨の打撃をあたえた——心象的にもけつして明るいものではなかったが、それをむしろ背後に置いて作者としての客観性はけつして崩さずむしろニューヨークと

いう大都会に生きる新たな感興を中心に社会主義リアリズムに一つの里標を打ちたてたのであった。上記の作品での主人公の一人バジル・マーチは作者の分身であり、その文明批判者の鋭い観察を通して、一人の石油成金ジャコブ・ドライフース老人とその息子コンラッドの悲劇的な生のてんまつが語られているのである。

しかしハウエルズの姿勢にはそれなりの限界があつたことは否めない。それはたとえば彼が一八八九年ごろから文芸雑誌ハーバーズ・マガジンに文芸炉談を連載したなかにも一貫してうかがわれる。そのなかでかれはロマン主義に対してははつきりと袂をわかつかのように、「批評の分野では、偽りの神々やぶざまな英雄像を打ち破るのが批評家の努めである」といい、現代の小説はあくまで「單純で、自然で、純正である」のが望ましいとして、小説を風俗(mores)の次元にまで引き降しているのはいいとしても、自然主義が人生のうす汚れた姿態を描くのは反対で、もとより「陽気な日常人たる使徒」であるアメリカ人には性格的に合わぬような発言をしている。彼にはドストエフスキの「罪と罰」はアメリカ人には悲劇的すぎるといった先入感があるために、自然主義小説の陋劣な世界にはへきえきしている面もあつた。彼がクレーン(Clayton)は擁護してもシオドア・ドライサーには冷たかつ

たエピソードがその間の事情を如実に物語っている。

その後ハウエルズは一連のユートピア小説などで社会主義への関心を逆説的に表現してはみたものの、大衆の抗議あるいは社会の貧困を徹底して描くところまではどうしても踏みこめなかった。このようにかれはアメリカ人の遍的な性格にかたよりすぎて、ヨーロッパの悲劇的理論を踏襲どころか消化することさえ回避してしまっている種の限界を見せてしまったともいえる。しかしかれの晩年にむかう落魄の心境を思えばやむをえぬことであつたのかもしれない。かれは自然主義理論にはなじめなかつたし、とくべつ奨励もしなかつた。しかし彼の文学上のパトロンとしての役割はじゅうぶんに評価されてしかるべきだろうと思われる。

さきにシカゴのテロ事件がアメリカの知識人を激昂せしめ、その視野に新たな可能性を引き入れたと言つてみたが、この事件がそもそもそのように人心に訴えたのもそれだけアメリカ人の生活には天変地異の激動が少なく下手をすれば安逸な日常性にはまりこんでしまう危機がじゅうぶんにあつたといふことの証拠でもある。もともとハウエルズが予見しているようにヨーロッパ流の悲劇的認識が育つはずもなかつたのだ。

しかし世紀の変わり目を中心として第一次世界大戦勃発

までのゆるやかなすそ野のひろがりの、おだやかな歴史の流れのなかに安住しきれない知識人も多かつた。その古きよき時代はソートン・ワイルダー (Thornton Wilder) の「われらが町」などにも見られるように静穏でつつましい、おだやかな市民感情に横溢していた時代であるようだ。一方現実を、さらには歴史を一時代前の物差しで測ることのできる人々にとっては、そう安閑としてはいられなかつた。この時代の知識人のジレンマをロバート・シュナイダーは「かれらの精神的内部の相克、すなわち過去の価値と、未来の科学的信念との相克」であると表現している。そうした知識人の代表的存在はすでに述べたヘンリー・アダムズであり、そのほかにもイーディス・ウォートンなどが挙げられる。

日常性に安住できずに、そのたゆとう歴史の流れに悲劇的視野をもちこんだのは、上記の二人のような過去の価値観にやや拘泥するきらいのある人々だけではなかつた。かのハウエルズがどうしてもふみこめなかつたおぞましい生活の深淵をのぞき込み、みずから潜入していった若い文人たちは、アダムズなどとは異つた価値観の相克をはつきりと認めざるをえなかつた。ステイブン・クレーン (Stephen Crane) とフランク・ノリス (Frank Norris) がその代表的な青年文人である。かたやニュー

ヨークのストラム街、かたやサンフランシスコの露地裏と、探求の姿勢を崩さず、しかも瑞々しい感性に支えられ、ノリスに言わせれば、クレーンは「外側から」ノリス自身は「内側」からその実態を小説化していったのだ。ともに小春日和ののどかな陽光に走るときならぬ稲妻のような短かくも華麗な曳影を残して世を去ったのである。

これら二人の文人は移入したばかりのゾラの理論を踏襲し、いかにも先達の業績に導びかれるようにして、ノリスは「獣人ヴァンドーヴァー」とか、クレーンは「街の女マギー」とかの作品で実験的な創作を試み、世紀末の安堵な生活感覚にしのびよる現代的な狂気や道徳的失墜、アルコール中毒などの社会問題を主題にして世人を驚かせた。かれらこそ正統なフランス自然主義者の嗣子であったといえる。しかしいずれの作品も登場人物は環境の繰り人形のようにあり、社会に生きてゆくに必要な象徴操作の能力をあまりにも欠いてしまった不適格な人間で、作者の意のままにはんろうされる人物としてすこしも性格発展を見せぬまま終ってしまっている。作者の関心はむしろそうした人物を作り出してしまった社会の実態、その貧困とみせかけだけの道徳の冷酷な制裁といった社会の欺瞞性への激しい抗議の姿勢にあった。そ

のために肝心の人物ははじめからその理論の実証のために供された犠牲にすぎぬ印象さえある。その印象を、同時代のもう一人の自然主義者ハムリン・ガールランドが農村青年の悲劇を描いた『本街道』のなかの一篇、「狭谷の奥」の一節を引用して言うなら、「蜂蜜の皿の中でもがいている蠅のごとく逃げ場を失っている無力な存在」というしかない。このあたりに初期自然主義者の、いかにも生硬な、それだけに生粋の自然主義文学の一面がうかがえる。

もちろんこの特性があるからこそ自然主義者と呼ばれるゆえんなのだが、かれらは短命すぎてアメリカ文化に内在する自然主義要因を長い目で見て消化してゆくゆとりがなかった。だからかれらがとらえたものは、人自己確認にたどりつくための過程ではなく、あくまで前時代のロマン主義者の体質を残しながら、それでも現実を直視しなければならぬ破目にいたったときにやむをえずとった主情的リアリストの性急な社会展望であった。そこが後期自然主義者と大きく異なるところである。

しかし後期の自然主義作家と言ったところで理論そのものに進展があったわけではない。自然主義の理論プロパーからすればむしろ初期の作家たちのほうが理論に忠実であったといえる。自然主義は一つのイデオログと

して一定のわくはできあがつてしまい、問題はその忠実な維持ではなく、むしろ形骸がどう残されていくかというものでしかない。そこにこのジャンルの隘路が存在する。

とすれば何を考えなくてはならぬかと言えば、その後文学運動でその残されたものはどのようなことをみずからの活路として見出したかということになるうか。それは第一にはアメリカという特異な風土のなかで、自然主義的要素はどのようにして表現されたか、そして第二には、風土ばかりでなく、いわゆる現代的な人間の存在の状況にあつて、作家はそこにひそむ決定的な要因にどう対処し、どう乗り越えようとしたのかにしろられると思う。しかし皮肉なことに乗り越えてしまえばもはや自然主義者といういまわしいレッテルを貼られずに済むのである。

まずアメリカの風土あるいは社会のしきたりのなかで自然主義的要素はどのようなものとして表現されたらうか。これはあくまで私流の仮説であつて異論の余地もあるだろうが、アメリカの先駆的女流文学者たちはいずれも自然主義的体質をもつていて、そのような隠された文学の可能性を引き出すのに大いに貢献したと思う。たとえば十九世紀末のニューヨークランドの地方色作家と

いわれるセアラ・オーン・ジュウエット (Sarah Orne Jewett) にその特質を見ることが出来る。彼女は数多い短編、そして代表作『とんがりもみの木の国』(The Country of the Pointed Firs 1896) など、メイン州の漁村の人々の篤実な生活を丹念に書きこんで一見田園の抒情のみを描いているような印象を与える。しかしその作品には片田舎にも押しよせる歴史の変革を悲しむ一種の終末感が漂い、その社会は「生と死」の「二重性」の両面に向つて開かれ、その一方は確実に「死」によつて閉ざされている。描く世界が狹隘であればあるほど、その緊密な人間関係、コミュニティとしての祭儀や風習が重要な役割を帯び、それだけにまたそれがしだいに風化していく印象はいたましい。ジュエットみずからは、『農夫フィンチ』のなかで主人公ポリリーを逆境にまげぬ、「いわゆる臆怯者が環境の犠牲者とよぶものにはならず環境を征服した」人物として創造したと言つているように、けつして自然主義者とはいえないが、そうした人物そのものよりも一地方の伝承的過去の系譜がまもなく絶えるのだという意識がむしろ人物の意志を超越しているように思われる。一見、限られた地平線、ここでは時間は永遠に繰りかえされる神話的な世界の構造を持ちながら、やがてはそのサイクルも閉じられるのだという悲愴

感がどこか飄渺として漂う。そこが彼女の自然主義的体質を言うゆえんである。

その世界の体質はおよそ異つてはいるが、同じくニューイングランドの農村の因襲を主題にした小説『イーサン・フロム』や『夏』で知られているイーディス・ウォートン (Edith Wharton) についても同じようなことがいえるだろう。ジュエットがメイン州の農漁村の伝承的過去の系譜の終末を見た作家であるとすれば、ウォートンはニューヨークの上流社会の古き良き風俗と、新しく卑俗な生活習慣の交替を目撃してやはり一つの時代の終りを書きついで作家だと言つてよい。初期の『歓楽の家』(一九〇六)には悲観的自然主義の色が濃く、主人公リリー・バートの生いたちから、一ときの成功(上流社会での)、そして失墜のプロセスは自然主義小説の典型的パターンと言つてもよい。しかしウォートンの場合も人物そのものの遺伝的体質とか自由意志云々よりも、その意図は「一八八〇年代にはじまったアメリカ生活の一連の悲惨な変化によって破壊された、一組のゆっくりと進化した文化的価値を記憶にとどめること」²⁷⁾であったのだ。しかもそのへ破壊Vの要因が、「文化的価値」のなかで徐々に醸成されていったことも言い添えなくてはならない。ウォートンはその歴史的必然をいたずらに感

傷に陥らず冷然と観察しており、その眼はコミュニティの腐敗した生態のみならずアメリカ文明に内在する金錢哲学がもたらす破壊的作用を厳しく批判したが、その体質から終局には滅びの美学が先行し、まわりついて離れなかつたといえる。

滅びの美学を言いつぐとすれば、ふたたびその世界を異にして大西部の消滅を描いたウイラ・キャザー (Willa Cather) にも当然触れておかねばならない。キャザーにまで来てしまえばもう二十世紀も二十年代になつてしまふが、たとえば『迷える夫人』(一九二三)にしてもその中心の時代は一八八〇年代であり、歴史的にも地理上のフロンティア消滅と期を一にしているから、上に述べた二人と時代を共有している部分もある。いや共有している時代を書くことが共通の感性をひき出すようでもある。

「民主主義はわたくしたちの生活に一樣性という現象を与えてしまった」²⁸⁾とはキャザーが一九二二年オマハで行つた講演の一部の言葉である。キャザーはことのほか文明、とくに科学に対しては敵意を見せていた。たとえば『教授の館』の主人公で大学の歴史学の教授であるセント・ピーターは学生たちにむかつて「現代の科学を人間の発展の一樣相として高く評価はしない」と言い、たしかに科学は精巧な玩具をわれわれに与えはしたが、

「われわれには何らの豊かな喜びも、新しい罪をも与えはしない」と言う。彼の主張では「人間の心、個々人の心はいままでいつも謎に心をめぐらせて生きてきたために興味深かった」⁽²⁹⁾という。教授の宗教神秘主義的生活への憧れはやはりキャザーの心象をそのまま表現しているようであり、彼女が文明を忌避した要因でもあるようだ。

その「謎」をはぐくむ世界はキャザーにとっては現実にはかの大西部の記憶しかなかった。「迷える夫人」のヒーローたるフォレストア氏がかつて少年のころ、西部を走る貨物運送業者の一員としてこの大草原を横切ったころには野牛は無数に群生し、草原の茫漠とした拡がりを経過してゆく日々をも忘れさせるほどであった。そうして収められた神話的な西部のイメージは西部を開拓する人々の内面の崩壊によって切り崩され、やはり風化していく運命にあったのだ。フォレストア夫人が大邸宅を売り、その沼地が干拓されていくプロセスは人物の肉体的衰退、精神的退行と併行して進み、西部消滅のいたましい歴史を如実に象徴しているのである。邸宅内の森に住むきつづきの目をえぐるというアイヴィー・ピーターズの残酷な行為はそのまま西部の魂あるいは神そのものの殺戮ではなかったのだろうか。もちろん一種の貴族趣

味、大農園制度に根ざした大自然との共存から生れるキャザーの神話的心情には批判もあろうが、そうした意識さえ消えてしまうほど彼女の心には過去の幻想が巢喰っていたのであろう。やむにやまれぬ心性が冒頭のような時代錯誤的な言葉となつて噴きてたと考えられる。その切実感とは時代の進行とともににはなはだしくなり、世代間の断層に怒りのようなものさえ感じていたようだ。一九二二年に彼女が「世界は真二つに割れた。私はその前半分に属している。」⁽³⁰⁾と言ったという有名な言葉はそうした事情を表現してあまりあると思われる。

こうしてアメリカの風土あるいは習俗のなかにひそむ自然主義的要因は、以上三人の女流作家の感性をまともて考えてみれば、ある一時代に凝固した人々の生活の徳性、あるいは生活圏のもつ豊かさに収斂された回想もしくは固執にひきずられて、その後の時間の推移がそうした世界の衰退もしくは頹廢でしかないという運命観のようなものであるうか。それはウィリアム・フォークナーの南部世界の閉じられた円環内の運命的性格とどこか類似しながらも、その世界のもつ祭儀的雰囲気の中で湧出してくる共同体としてのエネルギーあるいは狂気とか深い悲劇的認識はなく、神話的性格をもつにもかかわらず、むしろその瓦壊のプロセスに視点が置かれている。収束

するどころか遠心分離的に分解していつて最後にはまったく原形をとどめないだろうという認識が先行する。それゆえその内部の人間は啓示的現存として蘇えることもなく、柔軟性を失った不毛の時間と空間を歩まされる展望に立つ。時間は直線となり、世界は拡散していく。世界の「中心」(ミルチャ・エリアード)は永遠に失われるのだ。それだけに作家の個人的感想として神話的時間帯への執着、感傷めいた訣別感のみが深く刻まれることになる。

しかしこのようなアメリカ文化の展望を自然主義的要因として見出し、そのあくなき表現に賭けた三人の女流文学者の先駆的業績を忘れてはならないだろう。なぜならその後のアメリカ文学はこの「運命の力」との格闘をその大きなテーマの一つとしたからである。

そのことと言えばシオドア・ドライサーの文学は「運命の力」としての風土性がもつと「物質文明」というようなもろなかたちであらわれくる世界だと言えれば手っ取り早いであろう。すでに引用した文章にも明白に見られるように彼ほどこの人物質の力Vに洗礼され、その願望の彼岸が富や名声そして美の成就といったきわめて即物的なもの、唯物的なオブジェクトに限定されてくる人も珍らしい。その意味からも彼は唯物主義の代弁者のこと

く考えられ、実践主義作家のレッテルを貼られて、アメリカ文学の贖罪^{Redemption}羊ともいふべき存在になつていのである。

オランダの歴史家ヨハン・ホイジンガはアメリカを二度訪問し、そのたびにアメリカ文明論を残している。その二度目の一九二〇年代の訪問後に発表した『生活するアメリカ、考えるアメリカ』と題する論文のなかで次のように言っている。アメリカで発展した新唯物論の学問——行動主義——と「ドライサーの小説のあいだにはおそらく想像以上の深いつながりがあるのだろう。そこには社会の非人間化という強い感情が働いているに違いない」(「汚された世界」³¹)。(傍点筆者)。

ホイジンガはもとより宗教のもつ合一的雰囲気をも母型とし、理性を核にする形而上的な世界を理想とするのであるから、「行動主義」のような機械論的な人間探求の学問をよしとするはずもない。そこにドライサーが連想されて考えられている。その意味で彼はスケープ・ゴートなのである。

しかしホイジンガの指摘はやはりなかなか洞察に満ちている。すなわち、彼はアメリカにこのような学問が生れるのもそれだけにアメリカの社会が個々人の人間的なぬくもりを保つだけの余裕あるいは積極的な連帯性をも

たず、人間を一個を化学的有機体のように解体してしま
うきわめて冷酷なメカニズムをもっていると言いたい
のである。A社会の非人間化Vの現象が想像以上にびまん
していると言いたいのだ。このホイジンガのなにげない
言及がじつはドライサーの、そしてアメリカ自然主義文
学のもう一つの国民的性格を言いあてているのである。

ドライサーは「ジェニー・ゲアハート」のなかで、
「我々は抑止しようのない環境によって将棋の駒のよう
に動かされている」(59章)と言ひ、その社会的環境の
なかで「人は一度誤つと、すなわち動き慣れている領域
をはみ出ると：非運が待ちうけている」とも言う。この
ようにアメリカ近代社会は個々人を抱擁するどころか、
逆に機あらばいつでも放り出そうとする苛酷なからくり
をもっているようだ。それが一つの心理的な現実にすぎ
ないと言えるのであつても、そこに投与しようとするも
のにとつては、迷妄を脱しえぬかぎり永久にその捕囚と
なるのである。すでにのべたイーディス・ウォートンの
文学にすらその痕跡ははっきりと印されているのであ
る。

このA非人間化した社会Vのみごとなイメージはいう
までもなく「アメリカの悲劇」(一九二五)にもつとも
顕著に見られる。この作品のなかでは主人公のクライ

D・グリフィスが、ちやうど砂漠で旅人が喉の渇きに苦
しむあまりオアンスの蜃気楼を見るように、自分の領分
をわきまえずに、自己中心的な夢の現実化を急ぐあまり
に、自分を受け入れてくれるとばかり思っていた上流社
会のA蜃気楼Vを実在と見てしまつてゐる。逆に実在す
る社会は悲劇のヒロイン、ロバータ・アルデンと彼女の
家に象徴される貧困、そしてそこにはぐくまれる素朴で
自然な優しさをもつきわめてメンタルな世界なのだ。し
かしクライドの、金と美にくらんだ目にはその実在の世
界の価値感がつかめず、その世界を裏切つて、非在の世
界に魂を売り渡す。結果は勿論双方の世界から相應の応
報を受けざるをえないのである。しかしドライサーは、
あくまでクライドにとつては非在の世界のもつ、空虚で
しかもまつたくよそよそしい世界に激しい敵意を見せ、
そのからくりを暴き出して、迷える旅人クライドの魂の
死そのものをかろうじて救つてゐる。ともかくそうせざ
るを得ないほどその彼岸の世界はA非人間化してVしま
つたのである。

こう言つてしまうと、もはやあのゾラの定義めいた言
葉、「人間は生理的——化学的法則に従ひ、環境の影響
によつて決定される」(「実験小説論」)がいかにも杓子
定規のようでそらぞらしいし、たしかにクライドをそう

せめて行けば、その定規があてはまったとしても、小説じたいの魅力はおよそ別なところにあると居直つてみたくなる。

この定規で「アメリカの悲劇」を裁断してしまおうとする試みはいくらでも見られる。たとえばたびたび引用しているフィリップ・ラーブは、「自然主義小説の世界は、あまりに大きすぎたり、あまりにも無気力すぎたり、社会的習慣や物質的必然性によってあまりにも硬直化しすぎたりしてしまっているので、あの人間の執拗な自己主張——これがあるから悲劇によって主人公が正当化されて崇高な存在になるのだが——を許すことができないのである」と述べ、クライド・グリフィスを始めとするドライサーの主人公は「個人の帰属する背景によって完全に決定されてしまう……本質的には環境の力の道具にすぎない」と手きびしい批判を加えている。これはほんの一例にすぎないにせよ、ドライサー文学をこのように拘子定規ではかり、その悲劇の欠如が作品の価値を決するようなきわめて古典的な解釈を加えているのがかなり多い。

しかしこうした解釈ではもちろん欠落してくる部分が出てくる。一つには時代の要請というか精神というか、ともかくある時代に適応可能なドラマが次の時代にその

まま通用しないほど、生きている人間の自律性オノミヤクシのパターンが変ってくることで、いまさら「人間の執拗な自己主張」と言ったところでその表現の意味するところのものは現代ではますます内在化しつつある。つまり今や人間の言葉や行動は当為性ソツレンを捨てたところに成立するのがより本質的なものであり、個人の「自己主張」は客体を失った無の世界の中の、脈絡のない存在感を表現することである。それはけつして前時代的なニヒリズムの無為感などではなく、無を有として引き受ける現代人の本来的な存在回復の宣言でもある。だから今さら人間対環境の主客の問題をいいたしてみたところではじまらないのであり、自然主義的発想はもとより、悲劇そのものさえ反ヒューマニズムという考えが生れるのは当然なのである。

悲劇を言いだして論が少し先走ってしまったが、われわれの認識がすでにこの地点にまで行きついてしまっている以上、本来ならば文学的ジャンルの起因とその発展を言いだしても無駄なのかもしれない。しかしそれはあくまで認識論の発展なのであって、われわれの地上的存在の現実感覚とは彼我の距離があるのも忘れてはならないのだ。

前世紀の後半に端を発したアメリカの自然主義文学の系譜はいまはその命脈を絶たれたと言つてよいのかも知れない。この文学がおよそ歴史的な価値として文学史上に記されてしかるべき時期が来たのかもしれない。その定義的限界からしても、可能性はほとんど出しつくされた。だからわれわれに残された義務はその遺産を遺産として正当に評価することにあるのだろう。それを最後に整理してみたい。

自然主義文学が何を遺産として残したのか。これは易しそうでそう簡単に答の出せるものではない。しかしまず何といつても文学をすべからく凡俗の視界に引きおろし、より大衆の中にその主体性を押しひろげて行つたことであろう。これはとくにアメリカ文学では高く評価されている。おりしも「高貴な伝統」などと称される高踏的な零囲気が横溢していたときに、クレーンを始めとする青年文人が「陋劣な深淵」を現実として取らえ、さらにドライサーがその視点をほぼ水平化した貢献度を誇張しすぎることはあるまい。といつてそのドライサーですら完全な道徳的アナキズムに陥ちていたわけではない。むしろそれを超克しようとする汗みどろの苦悩が、彼をして理性と自由意志の統べるユートピアという設定を必要としたくらいであったからだ。また逆にいえばそ

うした倫理的規範が自然主義文学の限界そのものになつてしまつたともいえるので、そのあたりにこのジャンルのジレンマが刻まれている。

しかしこうした作家の努力によつて文学者の視座が大きく転換したところで生れたものは何としても人間をすべからく等価的に見るヒューマニズムあつた。今でこそこのヒューマニズムという言葉そのものさえ陳腐になり、むしろそれを超克する試みが普遍化しつつあるのだが、ともかく自然主義はすでに述べた定義からして虚飾に満ちた自然を赤裸な自然に取り戻し、それとの対応において人間を自然の力から解放しようとしたのである。すなわち、制度化した神からの人間解放というニヒリズムの運動と併行して、人間中心主義の大原則を唱えたのである。

アメリカ文学においてもその基本的姿勢はまづたく変らなかつた。ステイブン・クレーンは『街の女マギー』において、誤てるキリストの倫理的制裁から街の女を救済し、文字通り彼女を純粹の魂のまま天国に送りこもうとした。またシオドア・ドライサーは『シスター・キャリー』においてはいたいけな少女がやがてはたくましく生活の場を切り開いていく過程を全的に受容し、そのさまよえる魂をかたくなな道徳観から解放し、ひた

すら少女の生命力に信頼と希望を寄せて人間のひ弱な存在感に一つのアンチ・テーゼを投げたのだった。そしてこの人間中心主義的な文学の集約はやはり『アメリカの悲劇』に求められるのだろう。作者ドライサーは文字通り、自分の内に積み重ねられた我意や欲望や挫折の記憶と内省のすべてをこの作品にあますところなくさらけ出し、美や性や名声に寄せる青年の偏執めいた姿を通して、アメリカ青年の永遠の立像を彫琢して行ったのである。それは主人公クライド・グリフィスばかりではない。冷い湖底にひっそりと沈んで行った心優しい娘ロバート・アルデンを含めて、その一人一人の無罪証明をドライサーは敢然として試みたのだ。青年の見えざる部分に認識の手を差し伸べ、社会の冷たい仕打ちとからくりを暴露しながら、かれの無名の永遠なる墮罪から救恤を試みたのだった。作者の記録尊重の精神と、そのクリチカルな状況での微に入った観察の眼が、神の救いに代る無罪証明の力強い武器となったのである。背後に黒々と迫る社会の八非人間化したV実像をさらけ出して、青年男女の受難を一層万感あふるる映像へと昇華したのである。最後には人間的なるものが主張されねばならない。作者のそうした祈りが言葉となって吹き出したのだ。これはあくまで私見にすぎぬのだが『アメリカの悲劇』は

世界でも指折りの自然主義小説であると同時に、そのぎりぎりの可能性まできわめつくした今世紀におけるこのジャンルでの白鳥の歌と称してもよいのではないだろうか。

今までの述べてきたことは、あくまでアメリカ自然主義文学（あるいは小説）の輪郭をたどり、その特質をのべたものにはすぎない。その概要にしても書き洩らしたものは多い。とくにドライサー以後の自然主義の進展については一言も触れていない。しかしそれはそれなりの理由もある。自然主義文学は一つのパターンにすぎない。その発展という言い方は奇妙なのだ。発展とは自然主義を否定あるいは超克することの謂なのである。しよせんは捨て石的存在だと言いつても過言ではないからだ。

人間の生命の本質的部分が情念と生きる世界との相乗作用から生れることに変りはない。しかしその表現のスタイルは刻々と変化せねばならない。変って行かなくては人間の根源的な自由の可能性は相も変らず進化の果てのユートピアといったかたくなな彼岸にむかって封印されたまま投げこまれ続けるだろう。人間の認識の道はけつして直線的ではない。又どこに逢着するといったたぐいのものでもない。その蓋然性は今や捨て去られつつあ

る。認識の当為性^{ソラレン}を捨てた文学的表現こそ今求められて
いるものである。その中にあつてはじめて人間は自然主
義的な制約から完全に解放されるのである。その無限な
る精神の共和国を求める努力が今こそ求められているの
である。この小論をあえて序論と名づけたのも、その領
界を求める旅の出発点としたからである。

註

- (1) アメリカ文学だけについて言えばフィリップ・ラーヴの「自然主義の没落に関する覚え書き」(一九四二)がある。彼の言及はいろいろの問題点を含むので以下たびたびとりあげられるだろう。(『文学の直観』研究社叢書。原題 *Literature and the Sixth Sense*.)
- (2) William Barrett: *Irrational Man* (pp. 32-3 Doubleday Anchor)
- (3) ヘルマン・ブロッホ「ホフマンスタールとその時代」(十ページ 筑摩叢書)
- (4) 同書三一―三二ページ
- (5) 同書三七―三九ページ
- (6) フィリップ・ラーヴ(八一―八二ページ)
- (7) 埴谷雄高作品集(六七―七八ページ 河出書房)
- (8) Lars Ahnebrink: *The Beginnings of Naturalism in American Fiction* (p. 117 Russell & Russell)
- (9) ビュール・マルチノ「フランス自然主義」(朝日出版社)。

- (10) このあたりの記述はブロッホの「ホフマンスタールとその時代」の第一章第二節「虚飾の本質」を参考にした。
- (11) ワイリー・サイファー「現代文学における自我の喪失」(河出書房六四―五二ページ)。
- (12) ビュール・マルチノ「フランス自然主義」(朝日出版社九ページ)
- (13) 「ヒュール・ソラ」(新潮世界文学八〇六―六二ページ)。
- (14) Charles Walcott: *American Literary Naturalism: A Divided Stream* (Minnesota University p. 12).
- (15) Haskel Block: *Naturalistic Typology* (Random House p. 13)
- (16) フィリップ・ラーヴ「自然主義没落に関するノート」(八五―六二ページ)
- (17) 相馬庸郎著「日本自然主義論」(八木書店)の中の「日本自然主義と現代」参照。
- (18) Theodore Dreiser: *Jennie Gerhardt* (World Publishing Co. Chap. 17)
- (19) R・ホフスタッター「アメリカの社会進化思想」(研究社叢書 一〇六―一〇七ページ)
- (20) Theodore Dreiser: *Newspaper Days* (Fawcett Library p. 380)
- (21) R・ホフスタッターの上掲書五五―五六ページ。
- (22) T.S. Eliot: *A Sceptical Patrician* のなかでヘンリー・アダムズを称して「真空の水差しのみかたで羽はたく美しくも無力な翼をもった」知識人と表現している。この言葉

は何よりもアメリカでのハ価値真空V(ハルマン・ブロッホ)に生きるインテリゲンツィアの行き暮れた姿をみつけたいと書かれたもの。

- (27) Thomas Hardy: *Tess of the D'Urbervilles* ①中①、②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙、㉚、㉛、㉜、㉝、㉞、㉟、㊱、㊲、㊳、㊴、㊵、㊶、㊷、㊸、㊹、㊺、㊻、㊼、㊽、㊾、㊿、
①、②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙、㉚、㉛、㉜、㉝、㉞、㉟、㊱、㊲、㊳、㊴、㊵、㊶、㊷、㊸、㊹、㊺、㊻、㊼、㊽、㊾、㊿、
- (28) William Dean Howells: *Criticism and Fiction* (American Century Series)
- (29) Robert W. Schneider: *Five Novelists of the Progressive Era* (Cornell U.P. pp. 1~3)
- (30) Richard Cary: *Sarah Orne Jewett* (Twayne Publishing Co. pp. 118-119).
- (31) James Tuttleton: *The Novel of Manners in America* (Chapel Hill p. 124)
- (32) E.K. Brown: *Willia Cather* (Alfred Knopf pp. 226~27)
- (33) Willia Cather: *The Professor's House* (Alfred Knopf p. 68)
- (34) Elizabeth Shepley Sergeant: *Willia Cather a memoir* (University of Nebraska Press p. 159)
- (35) ヨハン・ハイジンガ『汚れた世界』(河田書房 二四八ページ)
- (36) フィリップ・ラーブ『文学と直感』(研究社 八六~七ページ)